

# 捨てる紙あれば拾う紙あり(研究経過途中報告) －新たな交流価値を生むかもしれないダンボールの切れ端－

福岡 龍太

When one paper dumps another pick ups. (Report on the progress of research)  
－ A piece of cardboard that may create new cultural exchange value －

Tatsuhiko Fukuoka

## はじめに

東海地方のある県境に全国的にも有名な一級河川がある。川幅は優に1キロメートルを越し、水面も同様にそこへ架かる鉄橋を走る東海道新幹線の一編成をすっぽり収めてしまうほどの、まさに大河である。鴻巣市と吉見町の間を流れる川幅日本で水面がわずか30メートルの荒川とは景色が違う。この一級河川には国道や高速道路も跨っており、文化、産業等の交流の要となっている。

両県の堤防のふもとには、それぞれ運営法人が異なる複数の福祉施設がある。筆者は2015年頃から生活介護の成人が多く在籍する右岸側の施設で、また、2016年頃からは対岸にある障害<sup>1</sup>(しょうがい)児の放課後活動施設において、絵画を中心とした造形活動を行っている。ある時筆者は、右岸側の支援職員に左岸側の施設での活動状況について、その内容を問われた。活動概要を説明していると、「堤防越しに見える、わずか数キロしか離れていない相手側の施設名や、規模どころかその存在も知らないなんて、私たちの視野は驚くほど狭い」と嘆く声が多く、支援職員より聞かれた。そして、近いうちにぜひ見学がしたいとの申し出はあったが、いまだ実現できず現在に至っている。

このように、割と近くに福祉施設があることを知らなかったという話はよく聞く。目の前の障害者の今を支援することに余裕が生まれないう限り、他の施設との交流などは考えにくいのだろうと筆者は納得する。今までこのような交流の必要性を感じつつも、特に行わなくとも運営ができてきた経緯を鑑みると、緊急性はないのかもしれない。

## I. 問題意識

### 1. 交流意欲

筆者が芸術支援活動を行っている福祉法人の多くは、監督機関との情報交換は行われているようだが、運営の異なる法人同士の交流はあまり活発ではないようだ。筆者は特定の法人に所属しているのではなく、すべて個人活動で外部組織としての立ち位置となる。よって、施設間の往来は自由に行うこと

ができ、またその頻度は自在に変更できるが、それぞれの施設運営に関わる情報の守秘義務が厳しく課せられる。そのため各施設の支援職員の多くは、横のつながりを望んではいるもののなかなか時間が取れないことと、つながる道筋を知らないため、状況を知ろうと筆者への問い合わせが増す。しかし筆者は、自身の活動の動きを伝えるだけで、筆者を介した交流を試みても望む情報を聞き出せないのが実情だ。また、利用者の保護者などから得ようとすることもあるようだが、これもほぼ不可能のようだ。

定期的に行われる福祉祭りなどのイベントに参加すると、法人の特色を十分に感じられる催しが目白押しだ。物品販売や日頃の活動の発表などが行われ、活発な交流が見て取れる。しかし、その様子を注意深く見ると、例えばパンを販売する場面において、販売する側も購入する側の支援職員も首から下がる名札を見合いながら、商品を挟んで笑顔で会話をしている。そして、それぞれ担当する障害者の様子を見守りながら、商品の売り買いの補助をしている。生活の一部分のほんのわずかな時間を特定の場所で共有する、“ピンポイント交流”が盛んであると言えよう。筆者と芸術支援活動で関わる支援職員が望む交流とは、これとは少し違うような気がする。

## 2. 交流を望む本質とは

繰り返し述べるが、「自分たちの知らない法人内では、どのような活動が繰り返されているのか」と筆者が支援職員に問われれば、あくまでも芸術活動の内容を客観的に伝えるだけで、それ以外の筆者の知り得る支援事業の詳細を口外することはない。様々な形態の障害者施設では、法人それぞれの立地や環境、文化や支援の歴史などにより理念が異なる。そして、どのような目標を掲げているのかもわかるため、それらを加味した芸術支援活動に関する理念も施設ごとに違う。守秘義務を無視してそれぞれの支援状況を伝えたとしても、参考にはならない。だから芸術活動の概要のみを伝えるようにしている。しかし、いくら活動概要に徹して伝えたとしても、支援職員の中には「うちの子たちよりは障害が軽いから、そんな活動ができる」といった相手を羨む声を持つ人もいる。運営の異なる法人との交流を望む声の先が、他者と比較して優劣を感じることにあるのならば、その交流は障害者にとって本当に必要なもののだろうか。障害者支援をする者が望む本当の意味の交流とは、いったい何なのか。

本研究では、ある特定の材料を介した運営母体の異なる福祉事業所や教育機関との芸術支援活動における交流を考察する。そして、価値観が付帯する材料を中心に、人の関わり方にある問題意識の解明を目指す。なお、本年度は昨今の社会事情により活動計画の半分にも満たない研究実践のため、次年度も継続する予定である。よって本年度の報告は、問題提起から活動実践の途中経過までとする。

## Ⅱ. 障害者や高齢者の社会的交流について

障害者や高齢者の社会的交流についての研究は、対象者に生じている何らかの困難を解消するための方策紹介が主である。例えば、訪問教育を受けなければならない障害児に対するICTシステムの開発は、教員と生徒のコミュニケーション能力の向上を促すことが見込まれて、この先訪れる社会参加への環境拡大に貢献している<sup>2</sup>。社会的交流の第一歩として評価は高い。また、日本の高齢化を支える介護福祉士を目指す外国人留学生を受け入れている大学では、特養での実習の際、日本語の理解に乏しいために生じる交流の停滞を解消するために、折り紙や切り絵などの手作業やゲームを積極的に取り入れているようだ。特に体を使った簡単なゲームなどは、リハビリ療法としての有用性にも寄与している<sup>3</sup>。障害者個々に注目しながら交流施策を試みる研究は他にも、農業活動を通じて社会と関わる取り組みや、将来の社会生活に向けた農業就労支援などが挙げられる<sup>4・5</sup>。取り組み自体に手ごたえを感じてはいる

ものの、実際に社会へ向けて羽ばたける状況とまでは言い難いようだ。また、障害児の放課後等の居場所を提供している施策では、個々レベルではなく、障害児全般と地域との交流が希薄な状況であるという問題点が改善課題とされている<sup>6</sup>。対象者がはっきりしている場合の対処に向けた研究は行われているようだが、対象者を包括的にとらえ社会交流を促す研究をまだ筆者は発見していないため、今後も継続して探していく。

### Ⅲ. 研究目的

運営母体の異なる福祉施設等を行き来する筆者は、2015年頃より絵画活動を行っている。限りなく個々の関わりを重視しつつも活動全体の環境を整えながら、地道な継続を心掛けている。活動を開始して間もなく、とある事業所で大量に捨てられるダンボールの山を見た。そして別の施設では、筆者の芸術支援活動のためにダンボールを購入していることを知った。筆者は捨てられてしまうダンボールの有効活用を起案し、両法人へ以下のような提案をした。

① 就労継続支援事業所A（以下A）で発生する、処分費を支払って捨てている不要なダンボールを、放課後等デイサービスB（以下B）や公立児童センターC（以下C）での芸術支援活動に利用させてほしい。

② B及びCにおける活動状況は随時Aへ報告する。

上記の提案を受け入れてくれたAでは、快くダンボールを提供してくれる。そしてそれをBやCへ筆者が持っていくと、たちまちそれが立派な材料となり、表現活動が具現化していく。A、B、Cに所属する人はお互いの面識がなく、「不要物」とされていたダンボールだけが唯一の共通理解となり、それを介した交流が新たな支援の価値観を生むのではないか。材料を中心とした交流を深めることで何かが芽生えるという仮説のもと、そこに本研究の価値を置き、交流は人だけが行うものであるという普遍的な考えに上書きすることを目的とする。この研究で芸術支援活動を行っている筆者は、Aで処分しようとしている材料を無償でBやCに運び、そこから生まれた表現活動の様子をAへ報告する橋渡し役に徹し、全体像を観察していく。

### Ⅳ. 研究方法

筆者は毎月、第1、第3金曜日には愛知県西三河地方の異なる市に本拠を置くAとBへ、また、第2、第4金曜日には岐阜県東濃地方の放課後等デイサービスや同県飛騨地方の障害者福祉施設へ、芸術支援活動を行うために赴く。愛知県三河地区のCへは不定期に開催される子ども向けの造形活動の補助を行うために赴く。しかし、近年の感染症による社会情勢悪化を原因に、第2、第4金曜日の2施設での活動は今年度いっぱい休止となった。

Aの工場では、大手自動車メーカーからの部品の製造依頼を請け負っている。毎日大量に運び込まれる部品を囲う、畳より大きく頑丈なダンボール板や、何かを巻き付けていた硬質のダンボールの筒などは、組み立て開始と同時に廃棄処分となる。また、精密部品を運搬するための専用箱の組み立ても請け負っており、切り込みや折り目の入った大きなダンボールも大量に運び込まれる。型抜きされたダンボールの切れ端もまた、処分費を支払って捨てる対象となる。活動当日の午前中に、ラクガキや絵が描けそうな比較的きれいな状態のダンボール板や、遊びに使いそうな筒や切れ端を筆者や支援職員が選別して、芸術支援活動を行う会場へ搬入する。昼食後の約45分の活動で使う分だけ、ダンボール板を適当な大



きさに筆者がカットする。残っている材料は、15時から18時まで芸術支援活動を行うBで使用する。Cから材料の搬入依頼があれば随時持っていく。BやCでの制作状況は、写真撮影などによりAの管理者へ筆者が報告する。

提供する材料の内訳は、Bにはダンボール板、Cにはダンボールの筒や切れ端を主としているが、要望により混在提供も行う。

次項では2021年4月から2022年1月までの活動結果を記す。



写真1 Aの会場のようす

## V. 活動状況

2021年4月17日（くもりのち雨）

11時に工場へ到着。厚手のダンボール板12枚をもらい、ダンボールを圧縮した長さ45センチの筒を6本もらう。Aの会場へ移動。ダンボール板4枚を加工して、昼食後より12時40分まで活動を行う。12時45分から新人歓迎会を開催し、13時にみんなで後片付けをする。

14時20分にBへ到着。筆者の体調が悪くなり、肩が痛く16時まで休憩をした。ダンボール板を運び込み、切らずにそのままラクガキに使用した。今日は女児4名と男児1名の合計5名の参加であった。1時間半の活動内容は、ダンボール板や筒にラクガキをして、筒はその後、身体運動の道具になった。17時40分に後片付けをして解散する。

5月21日（大雨）

10時15分に工場へ到着。ダンボール板を6枚、長短それぞれ12本の筒をもらう。会場へ移動。ダンボール板2枚を使用して、60センチの正方形を20枚程度切り出す。昼食後、いつもと変わらぬ活動が45分ほど繰り広げられた。新しくAに転勤した支援職員に、筆者が活動の流れと意義を説明する。大雨にもかかわらず13時まで、30名ほどの参加者は楽しんで活動をしていた。6月より新型コロナウイルスの感染が減少したことで愛知県の規制が緩和されたため、月2回の活動へ戻すことになった。

14時15分にBへ到着。特別支援学校でクラスターが出て学校閉鎖になったため、すでに数名の子どもが集まっている。ダンボール板4枚を車から降ろし、傷んだ端を切り落として絵画活動の準備をする。本日の参加者は初参加の小学部1年の3名（男子1、女子2）と男児2名、仲良し女子3人組の計8名。小学部1年の男子は、はさみ・カッターナイフを巧みに使いこなす。ダンボール板をすべて使い、瞬間に大人が2、3名入れるほどの大



写真2 提供された材料をほぼ毎回使い切る (B)

きな家を作った。壁にマジックで色を塗り、明日には完成できるようだ。17時30分に終了して、部屋の掃除を全員で行う。

**【所見】**大きなダンボール板は子どもの創作意欲を活発にする。今まで購入していたダンボールは、高価な割には薄くて小さい。その経験があるからこそ、子どもも支援職員もAからの材料提供に心の底から喜んでいるようだ。

#### 6月4日(雨)

10時45分に工場へ到着。長さの違う筒を6本ずつもらい、ダンボール板を15枚もらう。筒を車に乗せ忘れて10分後に工場へ取りに戻る。11時15分に会場へ到着。準備をして昼食後、活動開始。今回はダンボール板5枚を30センチの正方形にカットし、複数枚用意した。また、大型ダンボール板は端を整えて2枚連ねて床に敷いた。いつもと変わらぬ活発な活動は45分続き、13時に終了した。みんなで片づけをして、気持ちよく次回の再会を約束した。

14時にBへ到着。10枚のダンボール板をおろして、ベランダで傷んだ端を切り落とした。脊椎損傷の男児が今日、筆者が壁に偶然立てかけた大型ダンボール板に初めてラクガキをした。参加者は男児3名、女児2名の計5名。全員が2階広間で17時30分の帰宅時間までラクガキを楽しんだ。

**【所見】**とにかくダンボールの肌触りが心地よいのか、みんな寝そべって活動している。だらけているわけではなく、楽しみながら集中しているという感じだ。4月から通っている小学部1年の男子は、自分の思い通りの遊びができない場合にかんしゃくを起こして、ペンをダンボールに何度も押し当てて突き破ってしまう。筆者は彼を落ち着かせるために背中をさすると、5分ほどで落ち着く。これを何度か繰り返しながらも、2時間の活動は充実していた印象がある。

#### 6月10日(晴)

Bに所属している脊椎損傷の男児が、以前Aからもらった大きなロール状のダンボールと筒を使ってウエイトリフティングのバーベルを作ったと、Bの支援職員より連絡がある。それで遊んでいる動画と、それを抱えて寝ている写真が添付されてきた。すぐにAの責任者へ転送し、いつも材料を準備してくれる人たちすべてにお礼を伝えてほしいと筆者がお願いをした。

#### 6月18日(雨)

10時40分に工場へ到着。長い筒を9本とダンボール板を2枚もらう。11時に会場へ到着。前回カットしたダンボールが残っていたため、それのみを使用する。インクが出ないマジックを取り除きながら活動準備をした。昼食後、すぐに活動を開始。女性支援職員より、前回バーベルを作って遊ぶBの男児の画像に感激したとのこと。バーベルの材料は彼女が担当する作業場より排出されたものであったため、「また持ってくるので有効利用してほしい」と涙を浮かべて喜んでた。いつもと変わらず元気に活動して、12時55分から近所のイチゴを栽培している農場より試食のお誘いがあったため、みんなで食べに行く。昨年Aで制作された作品の写真撮影が終了したため、13時30分より筆者の倉庫からAの作品保管庫へすべて移動した。

15時にBへ到着。学校から戻った子どもから、個人ボードを見て宿題や課題を進めて、終わると楽しい絵画が待っている。今日の参加者は男児3人、女児5名の計8名。小学部1年の活発な男児は、短い筒を4本並べダンボールをカットして車を作ると言う。頭が出せるようにオープンカーになった。ドアもダンボールを切ってガムテープで貼ることで開閉できる。本人曰く、「とても工作が好きなのだ」というだけあって、とにかく手際よく進めていく。脊椎損傷の男児は、ひたすら筒にガムテープを巻き付けて遊ぶ。仲良し女児3人組のうち2人は2階でラクガキに没頭して、1人はオープンカーに触発されて車を作ると言い出した。施設に余っていたダンボール箱をテープでふさいで四隅に筒をはめる。動物

の体のようになるが、あくまでもこれは車のようだ。完成しなかったため、続きは自宅に持ち帰って作るという。活動は全体的に活発で、支援職員3名も一緒に遊びながら制作の補助を行っている。17時30分に終了。その後、全員で床掃除をして解散する。

**【所見】**もらった材料がBの子どもの遊びに有効で、それが宝物になっていることをAに報告できた。Aのスタッフの多くは「この材料からこの遊びを思いつくことに驚いた」と感激していた。材料をいただいたお礼は、材料で遊ぶ元気な姿を見せることであり、ここに金銭的、物的なお返しは必要ないようだ。

Bの工作が大好きな男児が活動に参加するようになってから、ほかの子どもの表現意欲が活性化されている。かつては動くことを怖がっていた脊椎損傷の男児までもが、ハサミを使って工作するようになった。表現意欲の活発な環境は支援職員や筆者が作るのではなく、整えるだけでいいのだろう。

### 6月19日（雨）

Bの責任者より、ダンボール板を加工して筒や円形のダンボール箱と組み合わせて作ったダチョウとキリンの像が写真添付で送られてきた。

### 7月2日（大雨）

10時30分に工場へ到着。大きなゴミ箱に、様々な形に切り抜かれたダンボールの切れ端が大量に捨てられているのを発見した。ここでは、不定期だがこのようなごみは大量に出ること。型崩れしていないものを集めて、本日のBでの絵画活動に使う。そして、これから出るかもしれない切れ端は、子どもの絵画活動で使うので可能な限り集めてもらうようお願いすると、丁寧に取り外して形別にまとめて保管すると約束してくれた。ダンボール板4枚をもらって会場へ移動。今日は2枚のダンボール板を縦15センチ、横40センチ程度に細長くカットして机に並べてみた。昼食後に活動を開始する。いつもラクガキをする人は描くものの大きさが決まっており、画面を細長くして描かない部分が増えるだけで、あまり効果は得られなかった。しかし、そのまま最後まで見守る。13時に、みんなで片付けをする。

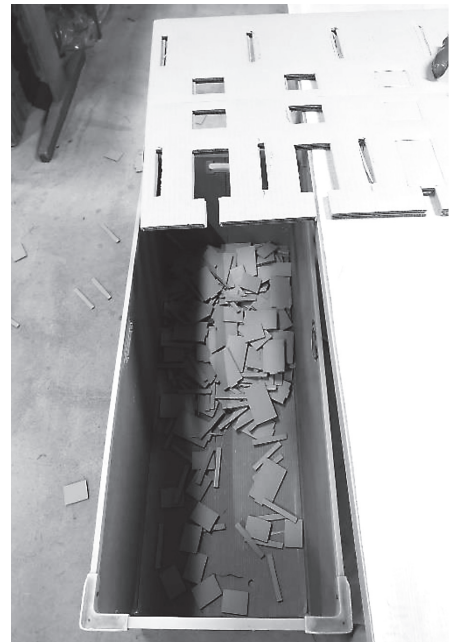


写真3 切れ端はすべて廃棄されていた

13時40分にCへ到着した筆者は、数日前にCより月末開催の夏祭りの飾りつけに使う材料の提供依頼があったため、すべてのダンボール板と、たまたまいただいた切れ端ダンボールの半分を提供した。

14時10分にBへ到着。切れ端ダンボールを今日の主な材料とする。参加者は10名(男児5名、女児5名)で、おやつ→課題→工作→絵画の順で活動を進めていく。今日は前回に残ったダンボール板をトンネルにして、クッションが巻かれたソフトブロックを土台に全員でアスレチックを作った。その横に、切れ端にラクガキができるエリアを筆者が作る。30分ほど経過すると、工作が大好きな男児が通う学校で新聞紙を長く丸めて剣を作る授業があったらしく、アスレチックのダンボール板を長く切ってもっと丈夫な剣を作りたい、と彼から申し出があった。筆者と支援職員だけがカッターナイフで切ることができるというルールに従ってもらい、ダンボールの剣を切り出した。ガムテープで補強をした剣で、17時30分まで遊んでいた。掃除をみんなで行っているとき、筆者は責任者より先日作ったダチョウの像の足が円



形ダンボールの筒で制作されているため、回転しないようにしてほしいと頼まれた。対策を施して写真を撮り、さっそくAの責任者へ報告した。18時に解散する。

**【所見】**筆者が赴くまでの2週間、Aで不定形な切れ端が大量に出ることは以前も知っていたが、今日のような異型のものが出るとは驚きである。ダンボールを思いのままにカットしようとしても、なかなか難しい。これは造形活動において非常に貴重な材料となる。工場の支援職員や利用者の理解と律儀な対応に、筆者は感激した。

Bの活動で筆者は、要望があれば何事に対しても許可をして見守ることを優先する。しかし、カッターナイフでダンボールを切るという行為は、一度大人が手本を見せる必要があるため、今日は子どもに行わせないようにした。危険を伴う活動も、決して拒否することはなく、安全確認ののち必ず体験できることを子どもに理解してもらうことが今日の目的であった。次回より少しずつ経験をしてもらえるように環境整備をする。

#### 7月16日(晴)

10時30分に工場へ到着。みんな汗だくで作業をしている。異形の切れ端をダンボール箱2箱分もらう。切れ端はウルトラマンの顔のようなものや、角度によってはホームベースに見えたり、家の屋根に見えたりするものもある。ダンボール板を7枚、長い筒を8本積んで会場へ移動する。50センチの正方形にカットしたダンボール板を15枚準備して、昼食後に活動を開始する。いつもと変わらぬ活動は、みんなの後片付けをして13時に終了する。

14時にBへ到着。夏休み前で授業が早く終わる期間になり、子どもがすでに来ている。参加者は9名(男児4名、女児5名)。課題→おやつののち、16時より活動開始。前回の影響が残っているのか、剣を作りたいという要望が多い。筆者の前でゆっくり切ることを条件に、カッターナイフでダンボールを切ることを許可した。剣を作る子どもは、切り出したダンボールに幾重にもガムテープを巻きつけて補強をする。そして自分の腰にビニールひもで括り付け、ダンボールを20センチほど細長く切ってそれを咥え、漫画「鬼滅の刃」のキャラクターを真似てポーズをとっていた。もちろん戦って遊ぶことも忘れない。その状況の中、ただ1人の女児が妹のためにチャイルドシートを作りたいと申し出た。ダンボールで座面と背面とを作り、ひじ掛け部分で固定する。強度を出すために、筒を座面裏前後に4本敷いてガムテープで固定する。全員作ったものを持ち帰るようにして、17時30分みんなで掃除をして解散した。

#### 8月5日(快晴)

夏休み期間だけ活動時間が11時から16時となったため、11時にBへ到着。本日の参加者は10名(男児4名、女児6名)。やきそばをみんなで作り、昼食時に食べる。午後は課題を終えた後、14時から絵画活動が始まった。今月だけ施設を利用する小学部1年の男児が初参加。すぐにラクガキを始めた。工作の大変得意な男児が、ストックしてあったダンボールの切れ端を組み合わせて飛行機を作った。その飛行機を初参加の男児が奪い取ろうとして、けんかになる。筆者は黙って使っていない切れ端を大量に床へまき散らし、2人の気をそらそうと試みた。幸い2人とも、すぐに床の切れ端を手に取り遊び始めたため、大事には至らなかった。全員けがもなく16時に終了、解散する。

#### 8月20日(雨)

11時に工場へ到着。小さな穴(直径2センチほどの丸)が5つ開いた畳ほどの大きさのダンボール板3枚と短い筒を10本もらう。型抜きされた切れ端が3箱準備してあった。すぐに会場へ移動する。すべてのダンボール板を3等分に切り、穴の開いた部分3枚と平滑な6枚とにした。準備をして昼食後より活動開始。平滑なダンボールにはラクガキが施されたが、穴の開いたものには誰も描こうとはしなかった。穴の開いたダンボール3枚は後日Bへ持っていく。13時に終了。今日はBでの活動はない。

## 8月27日（晴）

10時にBへ到着する。昼食の準備と食事をして13時から活動を始める。切れ端3箱と先週Aで使わなかった穴の開いた長方形のダンボールを床に敷いてラクガキをする。参加者は男児3名、女児5名の計8名。涼しいはずの室内だが、暑くてぐったりしている子どもが多く、15時まで何となくラクガキをして過ごした。

## 9月3日（雨）

10時30分に工場へ到着。ダンボール板3枚と大量の切れ端を5箱ほどもらう。すぐに会場へ行き、ダンボール板1枚を加工して準備をする。今日は雨がひどく湿気が多いため、ダンボールを反りにくくする目的で30センチ角の正方形に小さくカットした。13時に終了。

14時30分にBへ到着。今日の参加者は少なく、男児1名、女児3名の計4名。課題をこなし、おやつを食べると、いまだにブームが続いている剣づくりを始めた。カッターナイフを使用してダンボールを思いのままにカットできるようになった子どもは、とにかく長く作りたがる。1メートルを超える剣に巻き付けるガムテープは、あっという間になくなってしまふ。この状況を見越して、大量のガムテープを色違いで購入してあるため、子どもは最後までストレスなく活動に集中している。ずっしりと重く、カラフルで長い剣が完成して17時30分に終了した。



写真4 Cの工作コーナーはいつも満員のようだ

18時に切れ端をCへ持っていく。パーツごとに分けたストック棚と、そこから好きな切れ端を出して工作を行える「工作コーナー」が新設されている。すでに完成作品もいくつか展示されており、子どもたちが楽しく活動をしている様子を見ることができる。このエリアはいつでもだれでも利用でき、活動は完全に子どもの主体性によるものだと言う。早速写真を撮り、Aの責任者へ知らせた。すぐに返事が返ってきて、「知らない施設で多くの子どもが我々の準備した切れ端を喜んで使ってくれることは、何よりの喜びで、これからも丁寧に型枠から外し、コンスタントに集めてお送りします」とコメントが添えられていた。

**【所見】**Aの作業環境もBやCに所属する子どもの表現環境も日増しに充実しているようだ。横断的なかわりのすばらしさ、それをつなげる役割が筆者のような芸術支援を展開する者に課せられているのではないか。

## 9月17日（雨 台風）

10時45分に工場へ到着。ダンボール板6枚、切れ端を4箱、筒を大小6本ずつもらう。変わった形の切れ端を今外しているので、あとで会場へ持っていくと利用者のTさんより連絡があった。会場へ移動して準備をする。今日はダンボール板3枚を不規則な4角形に切って、作業材の上に並べる。昼食後、12時15分頃より活動を開始。外したばかりの切れ端を持ってきてくれたTさんが、「先生、ダンボールへ入れて入り口に置いときました。よろしくお願ひします」と深々と頭を下げ報告してくれた。筆者も丁寧に礼を言って、すぐに車の中に入った。いつもと変わらぬ活動は13時に終了する。

14時20分にBへ到着。分散登校のため3名の子どもがいる。徐々に帰宅してきた子どもから、おやつ→課題→絵画活動と自発的に進めていく。男児4名、女児4名の計8名が参加。ダンボール板を4



枚床に敷き、ラクガキや絵を描く者、剣を作る者、室内運動をする者など、各々が活動を楽しみ、あっという間に17時30分になった。みんなで雑巾がけをして終了した。今日は切れ端を出さずに、次回以降に使用する。

**【所見】** 天気が良ければ気分も向上し仕事はかどることは容易に想像できるが、Aの人たちは悪天候であろうが非常に元気がいい。台風が接近していても関係ないようだ。切れ端を持ってきてくれたTさんは、午後の仕事へ戻る直前、筆者に「自分たちの行動や存在を頼りにしてくれている人がいるのならば、喜んで何でもやります」と言ってくれた。これから行くBの子どもは、Aから持ち込まれるダンボールを見ると「やった。今日は絵画だ。なにつくろっかな」と叫び、喜ぶ。双方の生きるマグマがうごめいている。これは芸術支援活動の醍醐味だ。

Bを利用する子どもの中には、次年度より支援級から普通級へ移行する者もいる。

Bの支援職員は皆、子どもの主体性を尊重しているからなのか、多くの子どもに自立した生活と学修が見受けられる。

### 9月30日(くもり)

14時45分にBへ到着。本来活動する日は明日だが、筆者の予定で変更してもらった。到着するとすでに1階の床にダンボール板が敷き詰めてあり、子どもたちがラクガキをしている。特別支援学校の分散授業が今日で終了のため、自宅待機の子どもが集まっている。参加者は男児3名、女子6名、計9名。仲良し女児3人組が無言で絵画にとりかかっている。他も皆、黙って活動をしている。筆者はずっとその様子を見守りつつ、17時を迎えた。描いた部分をカットして持って帰りたいという申し出があり、さっそく筆者が切り出し作業を行った。17時40分に終了して解散する。

**【所見】** Bの子どもは、自分がやることがはっきりわかっており、進行は自発的でスムーズだ。絵やラクガキを描くことも、ダンボールをカットしてガムテープを貼り立体物を制作することも、偏ることなく楽しんでいる。制作物を自宅に持ち帰りたいという思いは、保護者に成果を見せたいという願望によるものだろうか。言葉と同等、もしくはそれ以上の価値のある、貴重な主体的表現を家族全員で見せてあげてもらいたい。

### 10月22日(くもり)

10時30分に工場へ到着。変わった形の切れ端が大量にストックしてある。ダンボール箱に6箱程度。ダンボール板4枚と合わせて会場へ移動する。いつもと変わらぬ活動で13時10分に終了。

14時30分にBへ到着。いただいた材料をすべて降ろして活動準備を行う。15時あたりから活動を開始する。参加者は男児6名(初参加の小学部1年を含む)、女児5名、計11名。初参加の男児が筆者の持



写真5 丁寧に切れ端を採集してくれるTさん

ち込んだダンボール板の上で寝転びだした。工作好きの男児がダンボールカッターを使用して家を作ろうとするが、寝転ぶ男児が微動だにしないことにイライラし始める。やがて暴言を吐くようになり、筆者が背中をさすりながら2人の距離をとった。同時に支援職員へ、寝転ぶ男児に付き添ってもらうように依頼をする。それ以降は問題が起こらなかった。17時30分に終了する。その後、筆者は切れ端を3箱Cへ運んだ。

**【所見】**制作能力の違う子どもを同じテーブルで活動させることは、ストレスを発生させる原因になる。これは健常、非健常に関係なく環境としてはあまりよくない。しかし、どちらかに有利な環境へ寄せるのではなく、狭くてもいいので場所を分けてどちらも有意義な動きができるよう工夫することが望ましいだろう。

#### 11月5日（晴）

11時に工場へ到着。ダンボール板3枚と切れ端を3箱もらい、会場へ移動する。ダンボール板2枚を20センチ×40センチの長方形にカットして16枚準備する。近頃、絵やラクガキをして完成したものを筆者に見せに来てくれる子どもが増えた。筆者は受け取ると過度に褒めることはせず、深くうなずくだけで裏面に日付を記入するようにしている。13時に終了。

14時にBへ到着する。次々と子どもたちが帰ってくるが、しばらくすると男児と女児それぞれ1人ずつが熱を出したため早退した。元気な仲良し女児3人組だけで活動を開始した。長さの違うダンボールの剣をいくつも作り、腰に括り付けて3人で戦っていた。17時過ぎに皆で掃除をして終了した。

**【所見】**季節の変わり目だからなのか、体調が一気に変化する子どもが増えた。楽しい活動を何とか続けようと、具合が悪くなったことを隠そうとする姿を見ると切なくなる。

#### 11月26日（晴）

10時30分に工場へ到着。今日も切れ端をダンボール箱に7箱も集めてくれていた。ダンボール板を2枚もらって、すぐに会場へ移動。準備をして昼食後より活動を開始する。いつものような活動で13時に終了。

14時30分にBへ到着。切れ端をすべておろし、Aの丁寧な選別と様々な形の切れ端で遊べる喜びを支援職員らと共に感謝した。ひとつの箱に300枚ほど切れ端が入っている。今日の参加者は男児5名、女児6名の計11名。剣を作るグループとラクガキをするグループに分けて17時30分まで活動をした。

**【所見】**「切れ端を大量にいただいても、2週間で子どもは使い切ってしまう」とBの支援職員は誇らしげに話す。これらの異型の切れ端を見て湧き出す彼らの発想力は、枯れることがないようだ。

#### 12月17日（晴）

10時30分に工場へ到着。ダンボール板4枚と切れ端5箱をもらう。11時15分に会場へ移動。準備をして通常活動を行う。13時に終了。

14時15分にBへ到着。参加者は男児2名、女児5名の計7名。来年度から普通級へ通う子がいるようで、メンバー交代が始まるようだ。工作が大好きな男児が前日、学校で図工の授業中にカッターナイフで左手中指の先を切ったらしい。それにより今日はお休みすると連絡があった。いつもと変わらぬ活動で17時に終了。

#### 2022年1月7日（晴）

10時30分に工場へ到着。ダンボール板4枚と切れ端5箱をもらう。ここで働く利用者の多くが、ずいぶん前より材料を皆で筆者の車に載せてくれる。11時20分に会場へ移動。正方形にカットしたダンボールを15枚準備して、新年を祝いながら活動を始める。久しぶりに自宅で絵画制作に没頭したMさんが、その絵を筆者に見せてくれた。「これはどうですか」と尋ねられたため、深く頷きガッツポーズを加え

て答えた。額装してほしいとの申し出があり、保管してあった新品の額縁に入れて会場の壁に掛けた。Mさんは満足した表情で、筆者と固い握手を交わした。13時になり皆で後片付けをして終了。

14時20分にBへ到着。ダンボール板4枚と切れ端2箱を搬入する。おやつと課題を終えて15時20分頃より絵画活動を行う。今日も剣を作りたいとの要望が多く、各自が好みの長さにダンボールを切る。そして誰が言い出したわけでもなく、全員が切り出した剣を当てて箱になるような展開図を書き、鞘(さや)を作り始めた。天井まで届く2メートル近い剣を作った者もいる。長すぎて送迎用の車では持ち帰ることができず、来週家族に取りに来てもらうことになった。17時40分に後片付けをして解散をした。

#### 1月21日(晴)

10時30分に工場へ到着。今日集めてくれた切れ端も変わった形が多く、その数は大量でダンボール箱8箱にぎっしり詰まっている。ダンボール板4枚と共に会場へ移動。30センチ程の正方形にカットしたダンボールを15枚準備して、12時15分より活動を開始する。いつもと変わらぬ盛況ぶりで13時に終了。

14時にBへ到着。材料を搬入していると、「絵画だ。バンザイ」と言いながら参加者9名(男児4名、女児5名)が帰ってきた。大きな斜め屋根の家を作る工作大好き男児。それを見た仲良し女児3人組は1メートル越えの剣を作ったり、ダンボールを折って大きな冷蔵庫を作ったりと、お互いを意識しながら大きな作品を制作している。他の子どもも、もくもくとラクガキをしている。17時45分になっても誰もやめようとしなため、明日も制作していいということで活動を終えた。

**【所見】**作ったものを持って帰るといふ子どもたちの要求は、それを保護者に見せたいためだけではないようだ。以前、脊椎損傷の男児が作った大きな鳥やバーベルなどは、持ち帰るとそれを抱いて寝たという。それだけ本人にとっては大切な作品なのだ。大きな作品は自宅に持ち帰るのが困難であるかもしれないし、自宅での保管に悩むだろうが、一度持ち帰り、気のすむまで家庭内に展示してあげてほしい。

## VI. 結 論

現段階における研究は状況説明にとどまるため、結論には達しない。包括的な関わりとは言え、細かな変化を見逃さないよう丁寧に観察する活動は、障害者支援の基礎である個人的な関わりと何ら変わりはない。よって、成果は期待するほど大きくはないかもしれない。先行研究にある個人の社会交流のためのプロセスや機器の開発は、自立した社会生活を目指すための大きな要素となり得る。しかしこの研究には、意志が統一されていない集団を、ダンボールという材料を介してまるごと社会交流に巻き込もうとする試みがある。凝った機器でもなく、用意周到な言葉でもなく、誰もが知っている、そして捨てられそうになっていたダンボールが、交流の要になるかもしれない。豊かで自立した社会を目指すために交流を望むのならば、この微小な材料が持つ未知数の価値に目を向けてもいいのではないか。芸術支援活動に不可欠な材料の中庸的な存在感は、障害者支援の意義の根幹を担っているかもしれない。もうしばらく地道に考察を重ねていく。



## おわりに

今回の報告は途中経過となっているが、現段階で言えることは2点である。

- ①誰かが自分の存在を知ってくれることが喜びとなる。そして自分を頼りにしてくれる人がいることを知ると、生活に活気が生まれる。
- ②誰かのために自分ができることが何かを知ると、丁寧に活動するようになる。

今は何となくダンボールを提供する側の視点が中心となっているが、今後は提供された側の考察をして総合的にまとめていく予定である。



写真6 豊かな見立て力を引き出す材料

本研究は2021年度 新潟青陵大学短期大学部学長個人研究加速化助成金により実践している。

- 
- <sup>1</sup> 筆者は自身の障害者芸術活動研究のすべてにおいて「障害」と表記する。戦前まで使われていた表記を使用することで障害者との関わりに一貫性を持たせるためである。
  - <sup>2</sup> 赤滝久美 三田勝己ほか「重症心身障害児の訪問教育を革新するICT（情報通信技術）システム」『日本重症心身障害学会誌』日本重症心身障害学会2018, 43(1), pp. 117-127
  - <sup>3</sup> 小島壮一「介護福祉に関する体験型授業の試みを通して－KUSEP日本文化・社会学習プログラム科目『日本における介護福祉の現状－』について」『金沢大学留学生センター紀要』2017, (20), pp. 39-57
  - <sup>4</sup> 前川良文「農園芸分野での障がい者就労支援の取り組み（特集 福祉農業）－障がい者の農作業訓練・就労支援－」『農業および園芸』養賢堂2013, 88(1), pp. 202-215
  - <sup>5</sup> 吉村亜希子 石田憲治「都市農村交流や地域活動における障がい者の農作業体験（特集 福祉農業）－障がい者の農作業訓練・就労支援－」同上書 pp. 183-187
  - <sup>6</sup> 宮地由紀子 中山徹「障がい児の放課後等の居場所づくり施策の現状と課題」『日本家政学会誌』日本家政学会2020, 71(4), pp. 240-248